

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.26

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

メガソーラー続々誕生

篠原地区において、昨年九月一日、5メガワットの発電出力を誇る「坪井町発電所」が、売電を開始したが、それ以前より太陽光発電所が続々と養鰻池跡地を利用して誕生している。おそらく篠原地区全体では10MWを越したであろう。この機会に「坪井町発電所」を例にその誘致経過をまとめてみる。

「荒廃した土地を何とかしよう」が発端

平成二十四年七月一日より、「再生可能エネルギー電気」の固定買取制度が施行された。それを見越して坪井町においては、JR在来線と新幹線に挟まれた草茫々の荒廃した土地を、メガソーラーで蘇らせようとした。思いは同じであっても、何せこの地は7ha余と広く、95人もの地権者である。そこで、全体としてまとまって進めようとして、「坪井町北土地活性化協議会」(以下協議会という)を発足して推進を図った。

固定買取制度の特徴

平成二十三年の3・11東日本大震災で、東京電力福島第一原子力発電所の事故

を発端に、政府の電力行政は大きく自然エネルギーに舵を切ったのである。具体的には、例えば太陽光発電では42円の固定価格で、20年間の長きに亘って、電力会社に買取りを義務付けられたものである。初年度は平成二十四年度中に電力会社に申請を受理されたものとして、期限付きであった。事業者にとっては売上リスクのない制度であるが、タイムリーにまとめないと成立しない。固定価格は年々引き下げられている。



坪井町発電所

事業者決定がポイント

協議会の最初の仕事は、事業者を決定することからスタートしたが、円滑には進まなかった。七社の候補をあげ公募したが、手を挙げたのは

東京の業者一社のみであった。それも設計、交渉の段階で社内調整が出来ず断念すると言ってきた。一時はお先真っ暗の状態だった。

そんな中タイミングよく手をあげてくれたのが地元の業者でそれが幸いした。土地全体で6MW以上、土地の中にある特高压送電鉄塔に直接系統連系して行こうと、至ってシンプルで

理想的かつ挑戦的な計画であった。賃料も東京の事業者より好条件が示され救われた。

幾多の難題を乗り越えた成果

その結果二十四年五月の協議会発足以来、二年と三カ月余と当初目標より約一年遅れたが、左表のような坪井町発電所が完成した。

坪井町発電所(略称)の概要

総面積	63,150m ²
発電出力	5MW (5,000KW)
パネル枚数	19,230枚
想定年間発電量	約600万KWh
発電量想定軒数	約1,600軒分
系統連系/ 中部電力	地内にある77KV 送電鉄塔
貸出地権者数	84名(連名2)
年間賃料単価	180円/m ²

そして地権者には九月一日に、一年分の賃料が支払われた。所期の目的が達成された。

二十一年間に亘る事業の維持安定を図る

20年間に及ぶので、協議会としては、事業者とは「公正証書による契約」を締結し、各地権者には「協議会規約」を配付し、長期にわたっての確かな維持管理を期している。発電所の安定なる運転を願うばかりである。(山下勝彦)

伊能忠敬の遠州路測量の中から

篠原小学校『波の音百年』の年表に記述

「文化二年（一八〇五）三月十八日伊能忠敬、門人を伴って篠原村外を測量する」とある。

伊能忠敬と言えば、江戸時代に全国の地図をつくった測量家として有名であるが、伊能忠敬が測量のためにこの地を訪れた際、宿泊した名主の竹村尚規が綴った道中記・日誌の一日の記述に大きな感銘を受けたのでここに紹介する。合わせあえて感想や考察、想像を述べらる。

竹村尚規日記抄よみ

入野村（浜松市）の竹村又衛門家から出た古文書を、関守敏氏が解説し、『遠州歌人、国学者 竹村尚規の道中記・日誌を読む』として、平成25年10月28日、羽衣出版から出版された。

乙丑文化二年
三月十八日測量方伊能勘解由殿
其外天文方上下十四人公儀御用
二付日本国中海辺御巡見被成候
由拙宅御泊一夜
則於拙宅庭終夜測量器建之天ノ
度数并星宿等 被致勤考畢
拙庭ヨリ度数三十五度
其外入野浦々棹小舟終日巡見被
致所也
(一部抜粋)

(上部の要点を解説)
一八〇五年
伊能勘解由は通称
総員十四名が竹村尚規邸（佐鳴
湖南岸）に泊った。
庭に於いて夜ごおし
緯度は星座（中国名）を利用し
竹村家の緯度は三十五度であつ
たと思われる。
棹小舟で佐鳴湖を一日中巡見測
量する。

竹村尚規のこと

遠州敷智郡入野村の造り酒屋で名主を務めた第八代竹村尚政を父に、母由紀子の嫡男とし

て生まれた。寛政八年（一七九六）の時、十六歳にして第九代の当主となり、竹村又衛門尚規と称した。享和元年（一八〇一）三月には、本居宣長を松坂に訪ね、門人となっている。

「終夜」の表現

実際は夜半には切り上げて片付けや観測値の整理もした筈である。連日の移動であるから、食事、休憩、睡眠を考慮していたであろう。

「星宿」

星座のことで、この時代は中国の星名に基き観測をした。現行暦で四月の夜空は曇りが多く、雲やガスの晴れ間をぬって子午線通過時の高度を測定したであろう。

緯度が「35度」

北緯35度を意味しているが、尚規はどうして35度と記述したであろうか。観測値を元に伊能隊は江戸のデータと比較して竹村邸の緯度をほぼ算出していたであろう。しかし忠敬は幕府の仕事として数値を絶対に口外していない。尚規には、

入野は34度と35度の間

と示唆したかも知れない。尚規にとって誤差は問題ではなく、一つの知見として記述したもの

ととらえたい。

伊能忠敬と竹村尚規の会話を想う

伊能忠敬が竹村家に宿泊した時は、尚規は25歳、忠敬は60歳で親子以上の年齢差はあったものの、国文学の素養もある尚規とは、仕事や接待の合間に、丁寧に接し合っていたであろう。天文学の話題においても、最新の情報として、日本人により改良された寛政暦のことや、西欧諸国では既に太陽暦（グレゴリオ暦）が採用されていること。また日本国内でも西洋天文学研究グループが正月を太陽暦1月1日で祝ったことも話したかも知れない。（天文の道を研究し幕府に召し出されたことも述べている）

浜松への来訪

伊能忠敬は浜松へは享和三年（一八〇三）と文化二年（一八〇五）の二回来訪している。前者では浜松宿の本陣、川口屋、舞坂宿の源馬十右衛門宅等に宿泊されており、後者には先出の竹村尚規宅、浜松宿本陣の杉浦惣兵衛宅、舞坂宿の源馬十右衛門等に宿泊している。それにしても、伊能忠敬の地図の正確さは驚きであった。

(参考図書)

- ・竹村尚規の道中記・日誌を読む 関 守敏著
- ・伊能忠敬測量隊 渡辺一郎著
- ・伊能忠敬の歩いた日本 渡辺一郎著 等

(鈴木義雄 遺稿)

「六部様」を新発見

東光寺の地蔵堂の中に、「六部様」があることが最近わかったので、報告すると共に「六部様」とはどういうものか調べてみた。

東光寺で発見した経過

東光寺の境内にある地蔵堂が、最近引戸の開け閉めが出来なくなるほど老朽化し、引戸の新装交換が余儀なくされたことから、中をしつかり見たところ、四体の地蔵様の一つが「六部様」であることがわかった。



台座に彫られた文字

東光寺の六部様

元文五年（一七四〇）江戸時代中期での話、願主は弥三郎という人が、先祖及び村の安泰を願って、六十六部を供養するために地蔵を作ったものである。

「六部様」といえば萬松院の供養塔

『浜風と街道』の伝説と由来の項に、萬松院の六部様のことが載っている。それは石塔であるが、正徳六年（一七一六）に立てられている。

六部とは書き写した六十六部の経典を、日本六十六諸国の霊場へ一部ずつ納めるために、回国修業をしていた行者のことである。六部様にまつわる話として、江戸時代、東八幡の山崎隆二さんの家の門先で六部様が行き倒れになり、村人はその死を悼んで裏の高山に墓を作った。その墓が「六部様」であるといわれている。そして明治になって萬松院に移されたのである。

重い病も六部様にお願ひしてすぐ快方に向かったと言われ、六部様は願ひごとをかなえてくださる、災難から護って下さるありがたい石塔であるとして、山崎一門に大切に祭られている。

東光寺の六部様も、おそらく最初から東光寺にあったのではなく、どこか道端か土手にあったものを、ある時、適当な場所として東光寺に移されたのではないかと思われる。

平成26年度主な活動

★ 山下孝先生講座

- ①「もう一つの伊勢」
- ②「蘇民将来の広がり」

★ 本年のテーマ

- ・現在の変化も把握し表す

★ 主な自由研究

- ・尺時計の表示板より
- ・八坂神社、お天王様
- ・篠原の偉人を知ろう
- ・伊能忠敬の遠州路測量から
- ・メガソーラー立ち上がる
- ・篠原に鈴木姓何故多いか
- ・篠原の祭りの変遷 等

★ バス旅行／小旅行

- ・6月19日：伊勢参りともう一つの伊勢
- ・11月20日：家康の散歩道

「六部様」伝説は全国各地に

同じような伝説が全国各地にあるようだ。

「日本風俗絵図」に六部の出で立ちが紹介されている。白装束で六分笠をかぶり、仏像や經巻の入った箱を背負って、村々を巡っていた六部の姿が、この篠原の地にも思われる。

（山下勝彦）



六十六部『日本風俗絵図 第七編』

ヨーロッパ旅行日程表

月/日	主な行程	宿泊
7/28	成田→ パリ-ブリュッセル	機内
7/29	河村家一同の出迎え	ブリュッセル
7/30	エッフェル塔	パリ
7/31	ベルサイユ宮殿	パリ
8/1	ルーブル美術館	パリ
8/2	ブルージュで運河巡り	ブリュッセル
8/3	日本人学校見学	ブリュッセル
8/4	アトワープの街と風車見学	ブリュッセル
8/5	河村家の見送りで帰途	機内

私のヨーロッパ紀行

長女夫妻と孫達の四大家族が、海外赴任でベルギーの首都ブリュッセルに住むのは、三年前からだった。(昭和六十二年)生活に慣れたので「ヨーロッパを案内するから来ないか」と誘われる。こんな好機は二度と訪れないとの想いで、妻と思い切り出掛けた記録である。

平成二年七月二十八日、家族に見送られて、成田空港より、二十一時サベナ航空262便に搭乗、ベルギー、ブリュッセル空港に七時二十分に到着する。所要時間は十七時間である。空港まで出迎えの河村一家と再会を喜び合う。

出迎えの車は左ハンドル、右側通行。市内は道幅は広く、電柱、電線は地下に移したか全然

見当たらない。更に広告看板の類も、殆ど見られない。整然として街並みが美しい。

ベルギーという国はどんな国

今回の旅行日程の大半を過す。

国土の面積は日本の1/12で人口は約一千万人である。立憲君主制国家で現国王はポルトワン

一世で、日本にも馴染み深い国王である。国内には数百の古城が散在している。ヨーロッパで最も美しい国の一つで、どの街へ行っても町中が美術館のようだと形容されている。またベルギー料理は世界最高とも言われている。ビール国でもあり、チョコレートもおいしい。

ブリュッセルとはどんなところ

人口百二十万人、ベルギーの首都であり、王室の居住地でもある。EC本部や、NATOの総司令部などの国際機関が集まっている。世界で最も美しい広場があり、様々な美術館や、歴史的な建造物を所有し、郊外には大きな森や城が点在している。有名なワテローの古戦場は18 km離れた郊外にある。ナポレオンが連合



軍に初めて敗れた戦場の跡で、此の小山は円錐形で、リエージュの女性達が小山を作るために土を负いかごに入れて、背にかついで集めた驚くべき量の土である。此の小山は高さ40 mある。頂上に至るには二百二十二段の階段を登ったが、息が切れてしまった。

ブリュッセルの国際空港は郊外10 kmのところにある。一口に言って、文化芸術の街ということが出来る。

(中山 清)

浜風会会報第26号
 篠原協働クラブ同好会「浜風会」
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
 編集委員 委員長 山下勝彦
 鈴木幹久 鈴木忠 中山清
 発行責任者 山下勝彦
 発行平成27年1月1日
 連絡先：浜松市篠原協働クラブ-気付